

〈市民〉と〈文明〉のあいだで
—“Economia civile”の訳語をめぐる—

Toward the “Spirit of Commerce”:

An Essay on the “Economia civile” of Antonio Genovesi

奥 田 敬

OKUDA Takashi

《この行政の科学 (science d'administration), この科学は政治経済学 (économie politique) と呼ばれていますが, 本来の語義においても, またアリストテレスの定義からしても, 対立する2つの単語を結びつけたものです》¹⁾と皮肉ったのは重農学派の最強の論敵ナポリの《小マキアヴェッリ》ガリアーニ (Galiani, Ferdinando, 1728-87) であるが, その当否は措くとして, この新しい科学に対して18世紀のイタリアでは別の命名も試みられていたことは注目に値する。例えば, ベッカリーア (Beccaria, Cesare, 1738-94) のミラノ帝室学校 (Scuola Palatina) での講義録 (1769-71) は——宗主国オーストリアの側では「官房学 (scienze camerali)」とみなしていたようだが²⁾——*Principi di economia pubblica* であるし, ヴェネツィアの修道士オルテス (Ortes, Giammaria, 1713-90) の主著は *Della economia nazionale* (1774) と題されている。

これらは一応便宜的に「公共経済学」や「国民経済学」と訳すこともできる。では, 1754年11月5日アントニオ・ジェノヴェージ (Genovesi, Antonio, 1713-69) を初代教授としてナポリ大学に創設された「世界で最初」³⁾の経済学講座の通称——正式名称は「商業と機械学 (commercio e meccanica)」, 後者は実質的には農業改良技術を指す——とされ, 経済学教科書の嚆矢として広汎に流布した⁴⁾その講義録 *Delle lezioni di commercio o sia d'economia civile* の表題にも掲げられている〈エコノミーア・チヴィーレ〉の場合はどうであろうか。管見のかぎりでは, 「都市経済」⁵⁾とする一例を除くと, 「市民(的)経済(学)」という訳がほぼ定着しているようにみうけられる。わたくしもこれをなかば踏襲し, 「市民の経済」で済ませてきた。だが, トレードマーク的な書名としてはともかく, 本文中の *civile* をすべて「市民の」で押し通そうとするならば, たちまち困難に逢着するのである。いささか長文の引用になるが, この『講義』の「序文」の冒頭の一節を見よう。

《すべての「学問」(Scienze)は有用であり, 熱心に育成されるに値する。いずれも, 人間の生活とそのあらゆる善の最初にして主要な道具である理性の蓄積を増進かつ洗練させるべく秩序づけられたものであるから。だが, 最初の「原因」を観想して永遠の幸福を明らかにする神聖なる学問の次には, わたくしが思うに, 我々の現在の便宜と平安に最も密接に関わり, それらを目的とするような諸学問こそが, 何よりも推奨・従事・育成されるべきである。それらのうちで, 「賢者」たちの共通した意見によれば, 第一の重要な位置を占めるものが, ギリシア人が倫理学 (Etiche) と呼び, 我々が道德科学 (Scienze morali) と呼んでいるものであって, それは他のいかなる学にもまして, 我々の品行と

¹⁾ *Dialogues sur le commerce des bleds*, London [Paris: Merlin], 1770, <貴B-3, 貴B-4, 貴J-314, 貴J-315, 貴J-544, Franklin-751>, p. 228 [*Opere di Ferdinando Galiani*, a cura di Furio Diaz e Luciano Guerri, Milano-Napoli: Ricciardi, 1975, pp. 545-546].

²⁾ 堀田誠三『ベッカリーアとイタリア啓蒙』, 名古屋大学出版会, 1996年, 233-234頁。

必要とをまぢかに注視し配慮するからである。そして実際、これらの「学問」はあらゆる点で人間の改善を目指している。つまり、狭義の倫理学は、人間を一般的に考察するものであって、我々の諸々の本能・感情・力の本性を明らかにすることによって、それらの鍊成を促し、我々を善き生へと向けて形成すべく努めるからである。「経済学」は、家族の「長」あるいは「支配者」としての人間に関連するものであって、家族をよく治め、家族

³⁾ 実際には世界初ではなくスウェーデンのウプサラ大学 (cf. Bentzel, Ragnar et al., *Economics at Uppsala University. The Department and its Professors since 1741*, Uppsala University, 1993) に次ぐこと、そしてジェノヴェージ自身——ストックホルムと取り違えながらも——それを仄聞していたことは、拙稿「18世紀ナポリ王国における「政治経済学」の形成——アントニオ・ジェノヴェージ「商業汎論」とその周辺——」(上)(下)、『三田学会雑誌』第79巻5-6号、1986-87年の注31でも触れた。にもかかわらず、ナポリの方が有名になってしまったのは、その担当者が当時浴していた全欧的な声望のためであろうか。次注であげるその主著の独訳に際して、ドイツ啓蒙を代表する雑誌 *Allgemeine Deutsche Bibliothek* の第19巻1号(1773年)には《ステュアートやフランスの『フィジオクラシー』なみの重要性をもつ著作であり……我々はドイツにおいてこの著作に匹敵しうるものをもたない》とする書評が掲載されたという (*Riformatori napoletani*, a cura di Franco Venturi, Milano-Napoli: Ricciardi, 1962, p. 178 n.)。ナポリが最初という通説化は、19世紀前半にマカロク——『高橋誠一郎経済学史著作集 第三巻 経済学史』、創文社、1993年(原著は、日本評論社、1936年)、363頁参照——やセイなどによってさらに推し進められたふしがある。セイの『経済学概論』(初版1803年)は第2版以降で「序論(Discours préliminaire)」の学説史的な叙述が増補されているが、そこには《1764年(マ)にジェノヴェージは、尊敬すべき賢者インティエーリの配慮によってナポリに設けられた講座において、経済学の公開講義を始めた》(Say, Jean-Baptiste, *Traite d'économie politique...*, *Seconde édition*, Paris: Renouard, 1814, <Menger. Fr.1429>, vol. 1, p. xxxvj) という言及も含まれている。おそらくは亡命イタリア人たちによる宣伝活動の影響であろう。その代表的人物の一人であるサルフィ (Salfi, Francesco Saverio, 1759-1832) がミショーの『人名辞典』(*Biographie universelle ancienne et moderne...*, *Nouvelle édition*, Paris: C. Desplaces et M. Michaud, 1854) に執筆したジェノヴェージの項目には“la première chaire d'économie politique” (vol. 16, p. 185) という記載が見られる。

⁴⁾ 同書は19世紀に至ってもイタリア各地で版を重ねただけでなく、ドイツ語とスペイン語にも訳されている。独訳(初版は1772-74年)の表題 *Grundsätze der bürgerlichen Oekonomie. Nach der neuesten und verbesserten Ausgabe aus dem Italienischen übersetzt von August Witzmann*, Leipzig: Paul Gotthelf Kummer, 1776, 2 voll., <貴 A-524> の下線部分はいわゆる「ブルジョワ経済学」を——マルクスはクストディ編『イタリア経済学古典叢書』(*Scrittori classici italiani di economia politica*, a cura di Pietro Custodi. Milano: G.G. Destefanis, 1803-1816, 50 voll.) 所収のミラノ版で読んでるのでおそらく直接的な関係はないとしても——連想させて興味深い。より重要な研究課題としてロシア社会思想史への影響がヴェントゥーリによって示唆されている。この独訳者ヴィッツマンは、1766年にエカテリーナ2世がライプツィヒに派遣した12名の貴族の子弟たちの指導にあたった人物であり、この翻訳の「献辞」は留学生の彼らに捧げられている。そして啓蒙と改革の時代の息吹にひとたび接した彼らが旧弊なロシア社会で苦境に陥ったとき、ペテルスブルグにまで支援に赴いたヴィッツマンを《ひとえに人類愛から、我々のために自身の幸福を犠牲にした我らの師》と回想しているのが、この時の留学生の一人でやがて〈最初の革命的インテリゲンチア〉と呼ばれるラジシチェフ (Radishchev, Aleksandr Nikolaevich, 1749-1802) なのである。Cf. Venturi, Franco, “Le Lezioni di commercio di Antonio Genovesi. Manoscritti, edizioni e traduzioni”, *Rivista Storica Italiana*, LXXII-3, 1960, pp. 522-526.

⁵⁾ 岩倉具忠・清水純一・西本晃二・米川良夫『イタリア文学史』、東京大学出版会、1985年、209頁。『通商、あるいは都市経済講義』というタイトルは、当時のナポリが人口40万人を越え、ロンドン、パリに次ぐヨーロッパ第3の大都市であったという背景を思えば捨てがたい妙味があるが、今日では「都市経済学(論)」との混同を招く恐れがある。

のために徳や富や栄誉を獲得できるように人間を教育する。最後に、「政治学」は、人民の大いなる「父」あるいは「君主」としての人間に関連するものであって、知恵と深慮と人間性をもって統治にあたることを彼に教える。そのなかでも、支配下の国民（*nazione*）をして、人口を増大させ（*popolata*）、富裕で（*ricca*）、勢力あり（*potente*）、賢明にして（*saggia*）、優雅たらしめる（*polita*）諸規則を包括する分野が、**Economia civile** と称されよう。そして、立法の技術や、国家や帝国の保持の技術を含む部分は、全くの**政略論（Tattica Politica）**である。》⁶⁾

この *economia civile* は「政治経済学」と訳した方が日本語としては収まりがつく。実際ジェノヴェージも、経済学の講義を開始した当初のいわば副読本として編纂した『大ブリテン商業史』への序説「商業汎論」の時点では、「商業の政治科学（*la scienza politica del commercio*）」と「商いの実務（*la pratica della mercatura*）」とを峻別した上で、前者を *economia politica* と言い換えてもいたのである⁷⁾。それなのになぜジェノヴェージは後年になってあえて *civile* という表現を用いるようになったのであろうか。

一つの手がかりとなりそうなおことがある。それは、17-18 世紀には《ローマ法学が私法を中心に発展してきたせい、*“civil”* はまさに市民的ないし民事的な意味に用いられるように》なり、《このような流れに沿って、1748 年に刊行されたモンテスキューの『法の精神』では、*“civil”* は *“politique”* との対比で用いられることが多くなる》⁸⁾ という指摘である。例えば、《維持されるべき一つの社会の中に生きる者として考えられるかぎり、彼らは治める者が治められる者に対してもつ関係において法律をもつ。これが「国制の法」（*droit politique*）である。さらに、彼らは全公民（*citoyens*）が相互の間でもつ関係において法律をもつ。これが「公民法」（*droit civil*）である》⁹⁾ という具合である。ジェノヴェージは刊行直後から『法の精神』に注目しており¹⁰⁾、没後の 1777 年には彼の旧蔵書の欄外に残されていたという評注を附した『法の精神』イタリア語版がナポリで出版されている¹¹⁾。そこから浮かび上がってくるのは『法の精神』の共和主義的な読解に対抗して、君主政における「商業の精神（*spirito del*

⁶⁾ *Delle lezioni di commercio o sia d'economia civile... Seconda edizione napoletana*, Napoli: Stamperia Simoniana, 1768-70, <G.K. 900 (10407.7)>, vol. 1, pp. 7-8.

⁷⁾ *Storia del commercio della Gran Brettagna scritta da John Cary mercatante di Bristol...*, Napoli: Benedetto Gessari, 1757, 3 voll., <貴 A-B592>, vol. I, pp. XX-XXII [Genovesi, Antonio, *Scritti economici*, a cura di Maria Luisa Perna, Napoli: Istituto Italiano per gli Studi Filosofici, 1984, pp. 126-127]. この序説部分は邦訳がある。奥田敬（訳・解題）『アントニオ・ジェノヴェージ「商業汎論——商業についての一般的な論考——」（1751 年）』、一橋大学社会科学古典資料センター [Study Series No.27], 1992 年。

⁸⁾ 上原行雄「*civil* の概念と訳語に関する覚え書」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』, No. 7 (1987 年), 7 頁。

⁹⁾ モンテスキュー『法の精神』, 野田良之・稲本洋之助・上原行雄・田中治男・三辺博之・横田地弘訳, 岩波書店[岩波文庫], 1989 年, 上巻 46-47 頁。

¹⁰⁾ ジェノヴェージが 1749 年に出版した『論理学綱要』（*Elementorum artis logice criticae libri V.*）改訂版（初版は 1745 年）には“*Opus l'Esprit des les Loys systemata omnia politica longe post se reliquit.*”という一文が追加されており、これはイタリアにおける最も早いモンテスキューへの言及の一つだという（cf. Zambelli, Paola, *La formazione filosofica di Antonio Genovesi*, Napoli: Morano, 1972, p. 731）。

¹¹⁾ *Spirito delle leggi del signore di Montesquieu con le note dell'abate Antonio Genovesi*, Napoli: Domenico Terres, [1777], 4 voll., <貴 A-B320>. 同書については既に詳しい研究がある。De Mas, Enrico, *Montesquieu, Genovesi e le edizioni italiane dello “Spirito delle leggi”*, Firenze: Le Monnier, 1971.

commercio)』¹²⁾や「勤労の精神 (spirito dell'industria)」¹³⁾の可能性を探ろうとするジェノヴェージの姿勢である。

だが、そうとすればますます、前掲の「序文」の冒頭に明らかなように君主の学的一部分とされる *Economia civile* の訳語は宙にさまよってしまわないか。しかしながら、先の引用箇所続けてジェノヴェージは《*Economia civile* の研究は、文化的で洗練された社会 (*culta e polita società*) のあらゆる階級の人間にとって有益であるにもかかわらず》現状ではそれは望みえないので、さしあたりは資産 (*fondo*) の所有者たち・裁判官・神学者・財政家・地方行政官・国家の官僚の6つの階層に対してこの学の必要性を力説しているのであり¹⁴⁾、そしてこの学の帰するところは、ある意味では君主の役割の極小化ともいえるのである。

《大多数の者にとっては、こうした数限りない倉庫というのは、問題の解決としては奇抜で馬鹿げたように思われることであろう。人は言うだろう、それらを建設し、穀物で満たし、注意深く熱心に管理するためには、君主はどうすればよいのか、と。人々の需要に対して供給するためにはどうするのか、と。簡単なことだ。何事も為すな。ただ、為すに任せよ (*NON FARÀ NULLA, MA LAScerà FARE*)。葡萄酒で行われているのと同じようにするのだ。これが問題の解決である。》¹⁵⁾

これは巨大な公設の穀物備蓄倉庫と公定価格の設定を中心とする「食糧供給機構」(*Annona*)¹⁶⁾が一部の特権的大商人の独占をもたらししている事態を批判して、《数限りない倉庫》すなわち個々の生産者・流通業者・消費者のイニシアティブに任せた穀物取引の自由化(→《商業の自由》)が要求されているところである。ここまでくるとわたくしは、突飛なようだが福澤諭吉のタイトルからの連想で、「民間経済」という訳語をあてたい誘惑にも駆られ

¹²⁾ ジェノヴェージの『講義』の第1巻17章は「商業の精神と商業の自由について (*Dello spirito e della Libertà del Commercio*)」と題されている。そこでは「商業の精神」を育成するための《2つの重要な糧 (*due gran vetti*)》として《保護 (*protezione*)》と《自由、ただし組織されたもの (*libertà, ordinata nondimeno*)》が論じられている。

¹³⁾ *Storia del commercio della Gran Bretagna...op. cit.*, vol. II, p. 17 [*Scritti economici, op. cit.* p. 472]. 当該箇所については『三田経済学雑誌』第79巻6号の前掲拙稿101頁を参照されたい。

¹⁴⁾ *Delle lezioni di commercio o sia d'economia civile, op. cit.*, vol. I, p. 9.

¹⁵⁾ *Id.*, vol. I, p. 395. この箇所を含む『講義』第1巻18章は、ジェノヴェージが1765年に刊行したエルベールの『穀物政策論』イタリア語版に加えた「序説」(その背景については、拙稿「《商業の自由》の理念と現実——アントニオ・ジェノヴェージと1764年「大飢饉」——」、『イタリア学会誌』第37号、1987年を参照)を再構成したものであろう。引用部分に関しては語句の異同は少ない。ただし、1765年の「序説」では最後の2つの文のかわりに、《流れの傍らに付き添うのだ。正面から立ち向かうのではなく。これこそが、*civile* の智恵 (*sapienza*) の極致である。商業に関する事柄においては、面と向かっては何もしないことが、あらゆる財[善]を豊富に來たらしめる結果となるのだ》と続いていた。なお、葡萄酒云々については同じ頁の注で《王国内の全ての家は葡萄酒の倉庫である。これが葡萄酒が決して不足しない理由である。カトリック王フェルディナンドより以前には、小麦粉やパンについても同様だったのである》と説明されている。

¹⁶⁾ その実態については前注の拙稿で説明したが、その後次のような文献が現れた。Mascilli Migliorini, Luigi, *Il sistema delle Arti. Corporazioni annonarie e di mestiere a Napoli nel Settecento*, Napoli: Guida, 1992. Fazio, Ida, *La politica del grano. Annona e controllo del territorio in Sicilia nel Settecento*, Milano: Franco Angeli, 1993. Alifano, Enrica, *Il grano, il pane e la politica annonaria a Napoli nel Settecento*, Napoli: Edizioni Scientifiche Italiane, 1996. イタリア全般にわたる研究状況に関しては、Fazio, Ida, “I mercati regolati e la crisi settecentesca dei sistemi annonari italiani”, *Studi storici*, XXXI-3, 1990 を参照。

るのだが、いかがであろうか。

ところで、イタリア語の *civile* という形容詞の名詞形は *civiltà* であり、これは英・仏語の *civilization/civilisation* と同じく現在は「文明」の意味で用いられる。イタリア語にも *civilizzazione* という語は存在するが、今日では使用頻度が稀なようにみうけられる。いずれも 18 世紀後半に次第に概念として確立していったように推定されるのだが、英・仏語ではいったん動詞を介して名詞化するというプロセスでもとの形容詞 *civil(e)* の多義性はかなり限定されていったのに対し¹⁷⁾、形容詞からじかに名詞化した、あるいはラテン語の名詞 *civilitas* に直接由来する可能性も高いイタリア語の *civiltà* においては、〈市民性〉と〈文明性〉との錯綜した関係がながく尾を引いているはずである¹⁸⁾。例えば、末尾に 1753 年 12 月 30 日の日付があるジェノヴェージの最初のイタリア語での著作「学問と科学の真の目的についての叙説」の終わり近くには《学問 (*lettere*) に従事する者は、あらゆる手段によって徳 (*virtù*) と *civiltà* を再生 (*rifiorire*) させようと必死にならぬかぎり、自らの最高の榮譽のためにも、また祖国への最大の貢献 (*utilità*) のためにも、なにごともしえぬであろう》という一節があり、少し後では《学校の教師たちは都会らしさ (*urbanità*) や高貴な雰囲気 (*aria nobile*) の研究にほとんど留意していない》とも述べられている¹⁹⁾。

残念ながらわたくしの乏しい(かつ散漫な)読書の範囲では、18 世紀の南イタリアの文獻で *civiltà* という語を見かけた記憶はあまりない。例えば、18 世紀末葉におけるヴィーコ復興の代表的著作であるパガーノ (Pagano, Francesco Mario, 1748-1799) の『諸社会の起源・発展・衰退にかんする政治論集』でも、表題からの予想に反して *civiltà* という語はほとんど使われていない²⁰⁾。ヴィーコ自身の『新しい学』でも *civiltà* の用例は僅少かつ限定的で、邦訳(清水純一・米山喜晟訳、中央公論社『世界の名著 33 ヴィーコ』, 1979 年)で「文明」とされている箇所は原文ではおおむね(ラテン語 *humanitas* に相当するとおぼしい) *cose humane* であ

¹⁷⁾ *Oxford English Dictionary* によれば、「野蛮」に対置される「文明」の意味での *civilization* の初出はボズウェルの『サミュエル・ジョンソン伝』(1772 年)とされる。

¹⁸⁾ マキアヴェッリの『ディスコルシ』(*Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio*, 1531) の第 1 巻第 2 章では *civiltà* という語も使われている。邦訳(『マキアヴェッリ全集 2 ディスコルシ』, 永井三明訳、筑摩書房、1999 年、17 頁)では「市民の権利」となっているが、最近の一枚訂本(Machiavelli, Niccolò, *Opere*, vol. 1, a cura di Corrado Vivanti, Torino: Einaudi-Gallimard, 1997, p. 906)では《都市共同体において法の支配のもとで人々が存在・共生する様態》と注で説明している。

¹⁹⁾ *Ragionamento sopra i mezzi più necessari per far rifiorire l'agricoltura del p. abate d. Ubaldo Montelatici... con un discorso di Antonio Genovese... sopra il vero fine delle lettere e delle scienze...*, Napoli: Giovanni di Simone, 1753 [1754], <G.K. 639 (8780. 3)>, pp. XCVI-XCIX [*Scritti economici, op. cit.*, pp. 53-54].

²⁰⁾ わたくしは今のところ《ニノスが広大なアッシリア王国をうち立てたとき、この名高い国民[カルデア人]は *civiltà* に向けての偉大な行程(*corso*)を既に完成させていたのであった》(*Saggi politici de' principii, progressi, e decadenza delle società di Francesco Mario Pagano. Edizione seconda corretta, ed accresciuta*, Napoli: Filippo Raimondi, 1792, 3 voll., <貴 A-B591>, vol. I, p. 37 [*Saggi politici (1791-1792)*, a cura di Luigi Firpo e Laura Salvetti Firpo, Napoli: Vivarium, 1993, p. 71])という一例を見いだしたにとどまる。なお、メンガー文庫には今日では稀観本に属する独訳(1783-85 年刊の 2 巻本の原著初版による)の初版 *Versuche über den bürgerlichen Lauf der Nationen, oder über den Ursprung, Fortgang und Verfall der bürgerlichen Gesellschaften. Aus dem Italienischen übersetzt von D. Johann Gottfried Müller*, Leipzig: Pottischen Buchhandlung, 1796, 2 voll., <Menger. Ital. 339> も含まれている。

る²¹⁾。ただし、ヴィーコの周辺や強い影響下にあった人物が残した未刊の手稿中にはなぜか、それを補うかのような *civiltà* の用例が散見する。反デカルト主義の驍将ドーリア (Doria, Paolo Mattia, 1666-1746) が 1740 年代中葉に執筆したと推定される重商主義批判の先駆けともいうべき草稿『商人の商業 (*Il commercio mercantile*)』には《偽りの (*falsa*) *civiltà*》という言い回しが 2 回登場するし²²⁾、イタリア財政学の古典にかぞえられる『租税・貨幣・公衆衛生論』(1743 年)の著者ブロッジャ (Broggia, Carlo Antonio, 1698-1767) が 1730 年代に書き留めた『新しい学』への評注ノート (ナポリ国立図書館所蔵) では《野蛮 (*barbari*) には……*civiltà* の過剰 (*eccesso*) と欠如 (*mancanza*) の 2 種類があり、過剰の方が悪い……。それゆえ、極端な *civiltà* は野蛮に回帰する。ヴィーコ, 459 [邦訳 549-550 頁]。 *civiltà* の仮面をつけた野蛮は自然なそれよりもはるかに悪しきものである。……我々は教養ある野蛮 (*barbarie colta*) と呼ぶことにしよう》と記されているという²³⁾。なお、ブロッジャから経済学書に関する情報を提供されたモーデナ公国のムラトーリ (Muratori, Lodovico Antonio, 1672-1750) の、イタリア啓蒙の宣言ともいうべき『公共の福祉』の第 19 章「奢侈について」には、ムロンの『商業論』に言及して《奢侈は (彼が言うには) *civiltà* と都市の装飾 (*ornamento delle città*) を増大させる》という箇所がある²⁴⁾。

その一方、*civile* という形容詞の方は枚挙にいとまないほどに同時代の文献に氾濫している。とりわけ 18 世紀前半のナポリ初期啓蒙²⁵⁾の主要な著作についていえば、タイトルからしてまさにこの語の揃い踏みという観を呈しているのである。モンテスキューも引照している当時のローマ法の大家グラヴィーナ (Gravina, Gian Vincenzo, 1664-1718) の——これはまだラテン語の著述であるが——『市民法の起源』(*Origines juris civilis...* Leipzig: Jo. Friedrich Gleditsch,

²¹⁾ 例えば、第 5 巻「諸民族が再帰したときに生じる文明 (*cose umane*) の反復」でも《……トルコ人たちと礼儀正しく (*con civiltà*) 付き合う……》(*Principi di scienza nuova ... d'intorno alla comune natura delle nazioni*, Napoli: Stamperia Muziana, 1744, p. 493: 邦訳 521 頁) という一例しか見あたらない。また、第 1 巻での唯一の使用箇所《……未開民族を人間文明化しうる法 (*le leggi valevoli di addimesticare una gente barbara ad un'umana civiltà*)……》(p. 63: 邦訳 105 頁) も、やはり主として「礼儀」を指しているように思われる。

²²⁾ *Manoscritti napoletani di Paolo Mattia Doria*, vol. 4, a cura di Pasquale De Fabrizio, Galatina: Congedo, 1981, p. 277 & p. 353.

²³⁾ *Politici ed economisti del primo Settecento*, a cura di R. Ajello et al., Milano-Napoli: Ricciardi, 1978, p. 1040 n.

²⁴⁾ *Della pubblica felicità*, Lucca, 1749, <貴 J-521; Menger. Ital.322>, p. 267 ——引用箇所の頁数は偶々一致しているが、一橋大学所蔵の 2 冊の「初版(?)」は組版を異にしている。前者はクレス文庫所蔵本と同一のようであるが (cf. *Italian Economic Literature in the Kress Library 1475-1850*, compiled by P. Barucci and K. Carpenter in collaboration with A. Calcagni Abrami and R. Reinstein Rogers, Roma: Banco di Roma, 2 vols., 1985, p. 106), メンガー文庫本には“A chi vorrà leggere”と題した前言が欠けている——[*Opere di Lodovico Antonio Muratori*, a cura di Giorgio Falco e Fiorenzo Forti, Milano-Napoli: Ricciardi, 1964, p. 1630]。ブロッジャとムラトーリの関係については、Dal Pane, Luigi, “Di un'opera sconosciuta di Carlo Antonio Broggia e del suo carteggio con L. A. Muratori”, *Giornale degli economisti*, serie 5, XVII, 1958 を参照。

²⁵⁾ ナポリ初期啓蒙の世界については英語圏でもようやく包括的な研究が現れた。Stone, Harold Samuel, *Vico's Cultural History. The Production and Transmission of Ideas in Naples, 1685-1750*, Leiden-New York-Köln: E.J. Brill, 1997.

1708, <A-B579>)²⁶⁾。ドーリアの君主教育論に偽装した共和主義的な国家論『市民生活』(*La vita civile...*, Francfort [Napoli], 1709)²⁷⁾。未遂の急進的啓蒙の旗手ジャンノーネ (Giannone, Pietro, 1676-1748) が亡命を強いられる原因ともなった——ギボンの『ローマ帝国衰亡史』の最大の想源の一つでもある——『ナポリ王国文明史』(*Dell'Istoria civile del Regno di Napoli...*, Napoli: Niccolò Naso, 1723. 4 voll.)²⁸⁾。また、ヴィーコの『新しい学』もその主題は《本当の人間の文明社会的本性 (vera civil natura dell'uomo)》の解明を通じて《神の摂理を論ずる文明神学 (teologia civile)》²⁹⁾であったし、ブロッジャの『租税・貨幣・公衆衛生論』も序文で予告されているように本来はより広汎な *La Vita Civil-Economica* と題する未刊の書物の一部となるはずであった³⁰⁾。そしてこの公刊された部分においても、《自然な野蛮と教養ある (Colta) 野蛮という両極端に陥ることなく, civiltà を正常に中庸 (Mezzo) の状態に維持するのに有効なもの》として《経済における勤労 (Industria Economica)》の意義が強調されているのである³¹⁾。

このように見てくると, civile という語で形容される対象領域が, 伝統的な法や政治の世界から, 歴史の探究による視野の拡大を通じて, 「商業」という語に集約される同時代の世界経済の展開を射程に捉えるところまで変移していった様子が窺われるであろう。その過程で不可避の課題として迫ってくるのは, 古典古代以来の市民的な徳の理想を急激に富裕化しつつある近代の文明世界の現実はどう重ね合わせるかという難問である。周知のとおり「富と徳」の関連をめぐる議論はスコットランド啓蒙にかぎらず国民的なコンテクストを超えた経済学の形成時代の全ヨーロッパ的な規模での普遍的なテーマであったが³²⁾, それをまさに端的に表現しているのが《商業すなわち economia civile》というジェノヴェーजेの命名ではなかろうか。

ここで改めて先に引用した『講義』の冒頭部分を振り返ってみよう。するとジェノヴェーजेが *economia civile* の目的として, 単に国民の人口・富裕・勢力の増大だけではなく, 国民を

²⁶⁾ 木庭顕「G. V. Gravina のための小さな覚え書」, 『国家学会雑誌』第 111 巻 7・8 号, 1998 年を見よ。

²⁷⁾ ドーリアについてはさしあたり『三田経済学雑誌』第 79 巻 6 号の前掲拙稿 90-92 頁を参照されたい。英語圏でも近年この埋もれた思想家への言及がみられるようになった。ジェノヴェーजेとの関わりで論じた Pagden, Anthony, “The Destruction of Trust and its Economic Consequences in the Case of Eighteenth-century Naples”, in *Trust: making and breaking cooperative relations*, edited by Diego Gambetta, Oxford: Blackwell, 1988 (“*Fede Pubblica and Fede Privata: Trust and Honour in Spanish Naples*”と改訂増補して Id., *Spanish Imperialism and the Political Imagination. Studies in European and Spanish American social and political Theory, 1513-1830*, New Haven-London: Yale University Press, 1990 の第 3 章に収録) や, 全ヨーロッパ的な急進的啓蒙の一翼に位置づけた Israel, Jonathan I., *Radical Enlightenment. Philosophy and the Making of Modernity 1650-1750*, Oxford University Press, 2001 (特に pp. 670-674) などである。

²⁸⁾ 同書には早くから英訳 *The Civil History of the Kingdom of Naples*, tr. by James Ogilvie, London: W. Innys, G. Strahan...; Edinburgh: A. Symmer, 1729-31, 2 vols. (一橋大学経済研究所がマイクロフィルム (AMF/Q/25) を所蔵) があり, 仏訳は 1742 年, 独訳も 1757-70 年に出版されている。ここで表題を「文明史」と訳した理由については拙稿「ナポリ初期啓蒙における「文明史」の構想——ピエトロ・ジャンノーネ試論——」, 『甲南経済学論集』第 31 巻第 4 号, 1991 年を参照されたい。最近では Pocock, J. G. A., *Barbarism and Religion, vol. 2, Narratives of Civil Government*, Cambridge University Press, 1999 がジャンノーネとギボンの関係についてかなりの紙幅を割いて論じている。

²⁹⁾ *Principj di scienza nuova...*, *op.cit.*, p. 2 (前掲邦訳 50 頁)。Teologia Civile という表現は, p. 120 (邦訳 162 頁) と p. 145 (邦訳 185 頁) でも繰り返されている。

《賢明にして、優雅たらしめる》文明化をも掲げているのは看過できぬはずである。この点は本論中でもたびたび力説される。一例として、いわゆる「四段階理論」の先駆として注目されてもいる³³⁾「人口扶養 (nutrizione) について、また勤労 (industria) 一般について」と題された第1巻第7章の結びの部分のみよう。

《人類が絶頂に達したといえる最終段階とは、単に前述の諸技芸やそれらに付随して今日

³⁰⁾ ブロッジャはこの *La Vita Civil-Economica* と「商業の育成 (*La coltivazione del commercio*)」という2つの(あるいは一体の)著作の草稿をムラトリーに送って出版への助力を依頼したが、内容は有益だが叙述に体系性がないとして断られたことが1745年から翌年にかけての両者間の書簡のやりとりから知られる (cf. Dal Pane, *op. cit.*)。この草稿は散佚したものと永らく惜しまれてきたが、貨幣改鋳問題と徴税請負株の償還に関する意見書を出版して政府を批判したため6年間(1755-61年)の流刑の日を送ったシチリア島のパレルモの市立図書館に4冊からなる809葉の自筆草稿が現存していたことがその後判明した (cf. Ajello, Raffaele, *Arcana juris. Diritto e politica nel Settecento italiano*, Napoli: Jovene, 1976, pp. 369-374)。また、ハーヴァード大学のクレス文庫(『三田経済学雑誌』第79巻6号の前掲拙稿93頁注77では「ゴールドスミス・ライブラリー」と誤記した——慎んで訂正する)にはガリアーニの『貨幣論』を逐条的に批判した *Del Pubblico Interesse Economico, Politico, Morale, di Stato, e di Commercio, sostenuto, e difeso contro gli errori e le insidie de' Sensisti, Sofistici, Scettici ed Epicurei. Dissertazioni varie per la Civile Scienza sommamente utili ed importanti, di C. A. B. Prodotte in occasione di farsi gli esami, e le Note su di un'Opera intitolata: Della Moneta, Libri V., impressa in Napoli nel 1750 di Autore Anonimo.* と題する400頁程のブロッジャの自筆草稿が所蔵されており <G.K.593 (8477.1)>、そこには《金銀は本来的には(per natura)必要なものではなく、したがってそれで飾り立てたところで他人からの真の評価や敬意を人々のあいだに生じさせるようなものでは決してない。もしそんなことが生じるとしたら、それは真のCiviltàというよりはむしろ野蛮(Barbarie)の結果である》(p. 51)といった記述も見られる。なお、『甲南経済学論集』第31巻第4号の前掲拙稿の222頁注33でも若干触れたように、vita civile economicaという表現の先例はドーリアの『市民生活』第1部第5章で《野蛮生活(vita barbara)》・《節度ある市民生活(vita civile economica [moderata])》・《華美な市民生活(vita civile pomposa)》の3段階の《生活様式(forme di vivere)》の継起・循環を論じる箇所に見られる。しかも、そこではこの3つの《生活様式》が《civiltàと野蛮との相違(differenza)》(*La vita civile... Seconda edizione dall'autore ricorretta, ed accresciuta.* Augsburg: Daniello Hopper, 1710, p. 118)とも言われているのである。これがわたくしが現在までのところできとめた南イタリアでの印刷本におけるciviltàの初出である。

³¹⁾ *Trattato de' tributi, delle monete, e del governo politico della sanita. Opera di stato, e di commercio, di polizia, e di finanza: molto, alla felicità de' popoli, alla robustezza degli stati, ed alla gloria e possanza maggiore de' principi, conferente e necessaria.* Napoli: Pietro Palombo, 1743, <貴A-B619>, p. 178.

³²⁾ Cf. Robertson, John, "The Enlightenment above National Context: Political Economy in Eighteenth-Century Scotland and Naples", *Historical Journal*, XL-3, 1997. ただし、啓蒙をpatriotismとcosmopolitanismのいわば蜜月ととらえるヴェントゥーリ史観にはわたくしも基本的に同意するが、経済学(political economy)を《人間の条件を改善しようとする知的・政治的運動としての啓蒙のアイデンティティの中核》(p. 672)と押さえた上で、フランスを啓蒙の(思想的)《支柱(fulcrum)》(p. 696)と認めるからには、経済的な中核にあったイングランドの周辺に位置したスコットランドと辺境の啓蒙の一典型ともいべきナポリとのコンテクストの相違はやがて19世紀以降のinternationalismの逆光のうちに露呈されるはずである。問題は同じでも解答は異なるのか、問題は違っても解答は同じなのか?

³³⁾ Cf. Pesciarelli, Enzo, "The Italian contribution to the four-stages theory", *History of Political Economy*, X-4, 1978.

では220種近くに達している諸技芸だけでなく、学芸 (le buone lettere) や科学 (scienze) も同様に繁栄している段階である。これらは人々の才知を動かしてそれらの種子を花開かせるだけでなく、人々をより正しく率直で偉大にするので、人々を啓蒙してこれまで卑賤視されていた職種に対しても違った見方をさせる。付言すれば、この光明 (lume) は直接的にも間接的にも下層民 (popolo minuto) のあいだに射し渡し、彼らのすべての行いに活気を与えるのである。いかなる国民といえども学芸と科学を大成せずしては技芸を完全たらしめられなかったこと、また、学芸と科学が消え失せたところでは技芸もまた衰退し粗野きわまりなくなったということは、過去のあらゆる世紀の経験である。……それゆえ立法者は、技芸の精神を普及・改良しようと望むのなら、科学もまた保護しなければならない。だが、おわかりであろうが、わたくしが科学とっているのは、術学的な精神でもなければ、抽象的で奇怪な観念の研究でもない。自然のうちに基礎をもたず、人間にとって確実に有用であることを意図しないよう研究はすべて、空しく有害な仕事である。》³⁴⁾

ここで《前述の諸技芸》と言われているのは、1. 狩猟・漁猟 (caccia, pesca), 2. 牧畜 (pastrale), 3. 農業 (agricoltura), 4. 冶金 (metallurgica), 5. 製造加工業 (arti miglioratrici), 6. 商業 (commercio) のことであるから、ジェノヴェーজの場合は実は7段階論なのであるが、その最終段階を《学芸や科学》とするあたりには、ヴィーコの『新しい学』の《人間文明の順序は次のように進む。まず最初に森、次に小屋、それから部落、つづいて都市、最後に学院》³⁵⁾というくだりと共通の発想（あるいは影響）が感じられる。だが、ジェノヴェージは先行者であるヴィーコ、ドーリア、ブロッジャらのように《文明の過剰》を憂いはしなかったし、ましてや同世代人ルソーのように《文明社会》そのものを告発することは思いもよらなかった。《友よ、我々は未開人 (selvaggi) なのです。そして、ルソー氏には失礼ながら、わたくしにとつては「未開」と「不幸」とは同義語なのです》³⁶⁾。

《我々が目覚めぬかぎり、我々は望むものを得られぬでしょう》。1754年夏、経済学講座の開講を控え《当今の勤勉な若者たち (studiosa gioventù) に研究の醍醐味をあげてもらえるような商業の理論の入門 (introduzione alla teoria del commercio)》を準備しつつあると友人に伝える書簡のなかで、ジェノヴェージはこう呼びかける。《友よ、我々はまた再び、祖国 (patria) を持つわけではありませんか。国民にとって自分たち自身の君主 (principe proprio) を持つということがどんなに利点があることか考えてみようではありませんか。国民であるという名誉に関心を払おうではありませんか》³⁷⁾と。2世紀余りに及ぶハプスブルグの支配から漸

³⁴⁾ *Delle lezioni di commercio o sia d'economia civile, op. cit.*, vol. 1, pp. 147-149.

³⁵⁾ *Principj di scienza nuova...*, *op.cit.*, p. 93 (前掲邦訳135頁)。参考までに原文も掲げる。“L'ordine delle cose umane procedette, che prima furono le selve, dopo i tuguri, quindi i villaggi, appresso le città, finalmente l'Accademie.”

³⁶⁾ *Lettere accademiche su la questione se sieno più felici gl'ignoranti che gli scienziati...* Napoli: Stamperia Simoniana, 1764. in Genovesi, Antonio, *Autobiografia, lettere e altri scritti*, a cura di Gennaro Savarese, Torino: Feltrinelli, 1962, p. 405. なお、歴史の7段階の4番目に「冶金」が独立して設けられているのも、本文では明言されていないが、《人間を文明化し、人類を墮落させたものは、詩人からみれば金と銀とであるが、哲学者からみれば鉄と小麦である》というルソー『人間不平等起源論』（本田喜代治・平岡昇訳、岩波文庫、1972年、96-97頁）を意識してかもしれない。

³⁷⁾ Lettera a Giuseppe De Sanctis, 3 agosto 1754, *Lettere familiari dell'abate Antonio Genovesi...* Napoli: Francesco Petraraja, 1788, 2 voll., <Franklin-2850>, vol. 1, pp. 104-105 [*Autobiografia...*, *op. cit.*, pp. 88-89].

く 1734 年に独立したとはいえ、ナポリ王国は未だに近代の文明世界の一員たりえていないというのがジェノヴェージの状況判断だったのである。そしてその遼遠な前途を指し照らすものこそ《有用な学 (scienze utili)》の最たる経済学なのであった³⁸⁾。

したがって、内実に即するならば *economia civile* を〈文明論としての経済学〉と敷衍することも可能であろう³⁹⁾。しかし、『商業すなわち文明としての経済の講義』では、ややまのびした印象を与える。結局、〈市民の経済〉という曖昧な訳語で辛抱するしかないのか。わたくしはまだ思いあぐねている。

【付記】本稿は平成 14 年度科学研究費補助金、基盤研究(B)(1)「近代共和主義の系譜とその現代的可能性の研究」による成果の一部である。

(甲南大学経済学部助教授)

³⁸⁾ もちろんジェノヴェージも手放しで楽観的だったわけではない。『講義』の出版直前の一書簡でも、こんな感慨を漏らしている。《道徳を改革しようと考えないのであれば、技芸や商業や統治を考察しても無意味です。ずる賢いのが割に合うと人々が思っているかぎり、きちんとした労働 (fatiche metodiche) に大したことを期待してはなりません。わたくしはうんざりするほどそれを経験しました》(Lettera ad Angelo Pavesi, 12 febbraio 1765, *Lettere familiari... op. cit.*, vol. 2, p. 34 [*Autobiografia... op. cit.*, p. 178])。

³⁹⁾ この意味で、ジェノヴェージにあっては《civile と定義された空間は地理的境界から独立したヨーロッパという空間として知覚されている》(Pii, Eluggero, “Piccole nazioni e grande mercato nell’Europa del XVIII secolo: uno schema d’interpretazione secondo Antonio Genovesi”, in *Quale mercato per quale Europa. Nazione, mercato e grande Europa nel pensiero degli economisti dal XVIII sec. ad oggi*, a cura di Piero Roggi, Milano: Franco Angeli, 1994, p. 109) という指摘は——注 32 に記した留保はあるものの——肯綮に値する。

* 一橋大学社会科学古典資料センターが所蔵する文献は <> 括弧内に分類番号を記しておきました。ただし G.K. はゴールドスミス・クレス文庫のマイクロフィルム版です。